



『教会はキリストの体、一人一人はその部分』

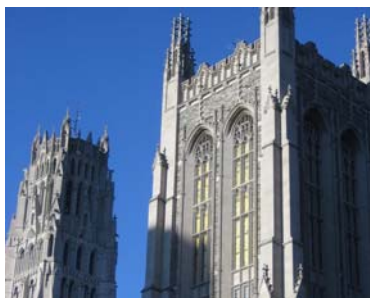
コリントの信徒への第一の手紙 12 章 27 節

日米合同教会は、特にニューヨーク市近郊に住む日本人並びに日本に関心を寄せる人々に、礼拝、交わり、学び、伝道・宣教の業を通してキリストの福音をのべ伝え、キリスト者として共に信仰を深めていくことを目的とする信仰共同体です。

◇牧師からのメッセージ

大雪、豪雨、そして太陽の輝き ◆2月の末に大雪の日が続きました。飛行機は飛ばなくなり、市内は大混乱に陥りました。やっと雪が止んだと思ったら、3月に豪雨と強風に見舞われました。多くの民家や自動車が、根こそぎにされた木や街路樹の下敷きになりました。電線が切断され、一週間以上も電気なしの生活を強いられた人々もいました。しかし、嵐が去った後、空を暗く覆っていた雲は消え去り、久しぶりにきれいな青空が広がり、暖かい太陽の輝きの下で街を歩く人々の顔も明るく輝いているように見えました。この私達の体験は、暗いレントの後に迎えるイースターの意味を理解する助けになるのではないのでしょうか。◆イエスの弟子達は、3年間もメシアだと確信し、寝食を共にした方が政治犯として十字架につけられたという事実打ちひしがれていました。イエスが大祭司や律法学者によって逮捕された時、彼を捨てて一目散に逃げ去ったという記憶は彼等の心に重くのしかかっていた筈です。一番弟子のペテロは、十字架の前夜イエスを3回も裏切ったという良心の痛みをどうすることもできなかったに違いありません。彼等は自分の存在そのものに自信を失い、絶望と悔恨の念にさいなまれていたのです。◆その彼等に復活のイエスが現れます。「主イエスは甦られた！主イエスは生きておられる！」この叫びは、弟子達の驚愕と信じがたいような喜びを表現して余りがあります。彼等の3年間は無駄ではなかったのです。この世の権力の前に完全に無力だったイエスこそ、死を克服した真実なる救い主なのだという確信に満ち溢れたのです。彼等は最早絶望することはないのです。自信喪失に陥ることもないのです。裏切りは赦され、弱さは強さに変えられたのです。

暗闇は光に変革されたのです。復活とは新しい出発です。生き直すことができることという喜びです。◆復活の意味、それは、空虚な墓の前で泣いていた婦人達の前に現れた若者の言葉に明らかです。「さあ、行ってペテロと弟子達に告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラ



ヤに行かれる。そこでお目にかかれる』と。」(マルコ16:7)ガリラヤとは彼等の日常生活の場です。自信喪失や絶望から解放されて、毎日を精一杯、人間らしく、生き生きと生きることが許されている。何故なら、主イエスは、あなたの重荷を背負いつつ、あなたと共におられるから。これが復活のメッセージの中心です。イースターが、大雪や大雨や嵐の後に来る青空や太陽の輝きにも似て、私達に生きる希望と勇気を与えてくれる神の賜物である所以がここにあります。

◇日曜礼拝説教の要約◇

■3月7日「イエスは良い羊飼ひ」ヨハネ10:11-15 主イエスは、「わたしは良い羊飼ひである」と言われました。「良い羊飼ひは羊のために命を捨てる」。つまり主イエスは、ご自分を羊の群れを襲い、殺そうとする狼から守る羊飼ひだ、と言われたのです。狼とは何でしょうか。狼とは人間の尊厳を否定し、搾取と抑圧の対象とする「支配の仕組み」と「その責任者」を指しています。武力と経済力を一手に納めた情け深い王様のダビデやソロモンも、主イエスの基準に照らしてみれば狼に他ならず、究極的には抑圧の仕組みの最高責任者であることに変わりはありません。◆また主イエスは、羊飼�としてのご自分を、狼を前にして逃げ去る雇い人と対比してもおられます。「羊が自分のものでない雇い人は、狼を見ると羊を見捨てて逃げ去る」。主イエスの時代における狼が、イスラエルを植民地にしてたローマ帝国だったとすれば、雇い人とはローマに媚を売っていた傀儡(かいらい)の王ヘロデや、ローマ帝国と調和を図るためにユダヤ教の神学的主張を薄めていた宗教指導者たちでした。主イエスは、犠牲になっている民のために、狼と雇い人の前に「良い羊飼ひ」として大手を広げて立ち上がったのです。「わたしは羊のために命を捨てるのである」と言われたのはその意味です。◆抑圧の仕組みの手先である雇い人にとって、羊である一人ひとりの人間は、モノでしかありません。しかし羊飼�は羊一匹一匹を「知っている」のです。「わたしは羊を知り、わたしの羊はまたわたしを知っている」。「知っている」というのは、顔は見たことがあるというような表面的なことではなく、神と人、親と子などの間に見られる、深い愛の絆で結ばれている人格関係を指しています。主イエスは私たち一人一人を、かけがいのない、宇宙で唯一の、限りなく貴重で、一個の人格的存在として心にかけておられるという意味です。私たちが、拝金主義や自己中心主義や民族差別や人種差別といった現代の狼を前にして、勇気をもって、良心的に、正直に、自分の善だけでなく他者の善に貢献しながら、人間らしく正々堂々と生き抜くことができるのは、この自分のために命を捨てることも辞さない主イエスの愛の眼差しの下にいるからです。

■3月14日「放蕩息子の兄」ルカ15:1-3/11b-32 放蕩息子の譬えの物語には後半の部分があり、そこでは放蕩息子の

兄が登場します。兄は夕方農作業から帰ってきます。音楽が奏でられ、おいしい料理の匂いがします。特別な日でもないのに何故だろうと不思議に思う兄は、その理由を聞いて激怒します。放蕩三昧を重ねてぼろぼろになって帰ってきた弟を、父親は拒絶するどころか喜んで迎え入れ、お祝いしているのです。弟が身を持ち崩している間、汗水たらして働いてきた兄の立場からすれば、これは余りにも不公平です。彼は怒って家に入ろうとせず、ディナー・パーティーをしてもらうべきなのは自分であり、弟は勤当されてしかるべきだと抗議するのです。父親は優しく諭します。「よく聞いてくれ。お前の弟はいなくなっていたのに見つかったのだ。死んでいたのに生き返ったのだ。お祝いするのは当然ではないか。どうか家に入ってわたしと一緒に祝ってやってくれ」。◆この放蕩息子の兄の物語は私たちに何を語りかけているのでしょうか。第1. 父親とは神のことで。第2. その慈しみは深く、絶えることはありません。神は悔い改める人を赦されるのです。第3. この限りなく、絶対的で無条件な愛は、人間の理屈に合いません。それは真面目人間を自認する者から見ると余りにも不公平です。そして第4. 兄は私たちです。私たちは、神を私たちの常識や理屈の枠に押し込めようとしています。神の思いではなく、自分の思いを中心に考えてしまいます。「弟を勤当してください。私のためにこそディナー・パーティーを開いてください」。この兄の言葉は私たちの言葉でもあります。◆しかし忘れてならないのは、父親は意固地で頑固な兄をも愛して止まないのです。兄が反発しようとも、辛抱強く彼を説得し続けるのです。神の私たちへの慈しみと忍耐が無限であることをそれは意味しています。そしてもう一つ読み落としてならないことは、この物語には結末がないことです。果たして兄は意地を張り続け、家に入ることを拒みつづけたか、それとも父親の説得に応じてディナー・パーティーに参加したか。これはイエスの私たちに對する問いなのです。神は私たちを説得し、待っておられるのです。家の門は閉じられることなく、ディナー・パーティーは続いているのです。

◇リーダーシップ修養会◇

教会のリーダーシップ促進を目的とした修養会が 3 月 5 日(金)・6 日(土)に JAUC で開かれ、20 人以上のメンバーが参加しました。◆5 日の会では、まず日下部ディーン兄が修養会の狙いを説明されました。「5 年前の JAUC リーダーたちのリストを見ると、その後4割の方が帰国や健康問題などでリーダーシップを離れています。幸い新しいリーダーたちが加わりつつありますが、次の世代を導く人を成長させていくことは大切な務めです。教会生活は難しい面もあり、時に傷つくこともあります。それは人間の性(さが)によるものですからこの教会も同じです。問題がある中でも励まし合って教会を建て上げていけたらと思います。リーダーシップはプロセスであって、特別な人が突然リーダーになるというようなものではありません。長年経験を積んでいく中で

自らのリーダーとしての性格が形作られていくのです」。◆賛美の後、鈴木先生から教会リーダーの役割についてメッセージがありました。「教会の目的はキリストに従う者を育てることにあり、リーダーはその手助けをする役割を持ちます。ここで参考になるのは、初代教会の使徒たちが直面した問題に対してどのように取り組んだかということです。使徒行伝などにあるように、ペテロやパウロといった指導者たちの間でもさまざまな問題が生じ、感情のもつれもありました。にもかかわらず初代教会がその後の教会の基礎となったということが大切です。問題を克服できたのは、彼らがイエスこそ主であるという信仰によって固く結ばれていたからでした。具体的にリーダーが心がけるべきことは、(1) 祈りと学び、信仰の実践を通して信仰を深めること、(2) 教会の使命、活動の方向について共通のビジョンを持つこと、(3) 教会の現状を把握し、何が課題か優先度をつけること、(4) 具体的な実行計画を持つこと、(5) 計画がどのように進んでいるかをチェックすること、(6) 自らの弱さを理解し、過ちがあれば悔い改めることです」。◆6 日の会は賛美と聖餐式の後、小グループに分かれて昨日の先生のメッセージから学んだこと、リーダーシップについて考えたことについて話し合い、発表しました。「教会におけるリーダーシップと世間一般におけるリーダーシップの違い」について考えたグループもあれば、具体的に JAUC が将来の伝道のために用いることが出来るリソースを挙げたグループもあり、活発な議論が交わされました。午後には、参加者一同は 12 月までの教会行事の準備について話し合いました。この 2 日間で学んだことが、今後の JAUC の活動に生かされますように。

◇霊的成長—スモールグループ◇

■4月の会の日程変更: 4月の女性信徒の学び会(SG1)は、9日(金)午後7時、24日(土)12時から行なわれます。場所は園田姉宅です。(スモールグループのリストは次頁末にあります)

◇祈りのリクエスト◇

次の方々をどうぞ日々のとりなしの祈りに覚えて下さい。■ロベルト・アセバード(アセバード兄のお父様)、ジェン・アーボン(春日姉のお嬢様)、伊藤ゆう子、岩佐敏男、奥田久子、熊田法子、小口愛(ウェストミンスター日本人教会)、久保スウ、ゴーマン美智子、田部一憲、野間美奈子、松本二三子、山田メアリ、吉田ジュンジ(バーンズ姉のお姉様の義父)、劉正花諸兄姉(50音順)

◇お知らせ◇

■礼拝中の挨拶の変更: 礼拝中の挨拶の時間があまりに長くなり、礼拝が中断される形になっているのではとの声が、理事会・役員会に寄せられました。このため鈴木先生の提案により、3月からは、挨拶の時間には、左右の席の方に「キリストの平和があ

日米合同教会月報 58 巻 2010 年 4 月号

りますように」と挨拶することになりました。これは初代教会の時代から行なわれている伝統的な祝福の言葉で、アメリカを始め世界中の教会で広く用いられています。

■**春のアルファコースと祈りの集い**：「キリスト教は初めて」という方のためのアルファコースが、4月28日から6月30日まで13回に渡って教会で開かれます。各セッションは毎週水曜日の午後7時から9時までの予定です。これに先立って4月13日(火)、このコースがキリストの福音をのべ伝えられるために大いに用いられるよう祈る集いが午後7時からJAUCで持たれます。他教会のアルファのリーダーたちと共に祈りと賛美のうちに時を過ごす予定です。よろしければ是非ご参加ください。21日夕には食事会も予定されています。

■**VIP集会**：3月8日(月)にJAUCで開かれたVIP集会では、本屋敷一彦兄が証しを述べられた後、元JAUC音楽ディレクターの熊田法子姉がO・メシヤンの大曲「栄光に輝く体」より3曲をオルガンで演奏されました。タカホー教会の嶋田あや姉も賛美歌「深き悩みより」を独唱して下さいました。NY・NJ地区の日本人クリスチャンが集まって学びや証しの時を持つこの集会は、毎月第2月曜午後7時15分から教会で開かれています。

■**折り紙イベント**：アウトリーチを目的とした折り紙イベントが3月20日(土)、JAUCで開催されました。当日は60の方が集まり、映画「Between the Folds (折り目の間)」を鑑賞した後、吉田ジェリ姉・ハツミ姉による折り紙ワークショップを楽しみました。

■**春の大掃除**：毎年恒例の教会大掃除が3月13日(土)に行なわれました。お手伝して下さいました方々に感謝いたします。

■**望月康恵姉**はコロンビア大学での1年間の研究を終えられ、3月26日に帰国されました。4月以降は本務校の関西学院大学(兵庫県西宮市)に戻られ、引き続き国際機構の研究、教育に携われる予定です。JAUCにおられる間は聖歌隊などで活躍して下さいました。日本での生活に豊かな祝福がありますように。◆**クインタナ晴帆姉**も3月9日、ご家族と共に京都に帰られました。「私は米国で様々なクリスチャンの方に出会ってキリストを受け入れました。神様を知らなくても幸せに生活できるかも知れませんが、神様の愛を知ってからは昔の自分にはとても戻りたくありません。救いは神様だけが与えて下さるものですが、神様は人々をそのご用のために用いられます。神様はJAUCを用いて私の信仰を支えて下さいました。またお会い出来ると思いますが、もしその機会がなくても天の御国で必ず会えることは、クリスチャンの大きな恵みだと思います」(出発前、礼拝での挨拶)。◆**なお、本屋敷一彦兄・美紀姉**も11日に帰国されました。お二人は東京の聖書神学舎の寮に入られ、同校で学ばれる予定です。

■**子供サマーキャンプのお知らせ**「ディスカバリーキャンプ」が、今年も7月25日から8月6日までシェルター島で開催されます。対象は3年生から10年生で2週間フル参加に限ります。案内パンフレットがこの月報に挿入されていますのでご覧ください。

◇理事会および役員会◇

3月の理事会・役員会合同ミーティングは6日、修養会の間に持たれました。この席で建物管理委員会は、牧師館の地下室・台所・浴室の修理のために合計6万ドルを準備することを提案し、検討の後、理事会・役員会はこの提案を承認しました。建物管理委員会はまた、牧師館の車庫に通じる道も修理が必要か否か今後検討するつもりです。現在の道は水はけが悪く、修理後の地下室にダメージを与える可能性があるためです。

◇郵送および特別献金◇

聖日礼拝での約束献金・会場献金に加えて、普段教会に来られない方々からの郵送献金、特別献金に感謝いたします。下記は2月21日から3月14日までに届いた献金の一覧です。Katsuko Bolster, Tatsuo Honma, JASSI, Yoshiko Kasuga, Noriko Kumada, Harry Kuwada, Koji Matsumoto, Mariko Nakamaru, NY Day of Remembrance, Ohara Flower, Sumiko Okada, Sunday School, Edna Suzuki, Rie Tora, VIP。また、ハイチ救援の献金(2/21-3/14)も下記に挙げます。Naoko Aita, Anonymous (2), Fujinkai, Akira Yokozeki (計385ドル)

月報チームからのお知らせ

数年にわたり月報の編集責任者として奉仕して下さいました園田雅代姉が、お仕事の都合のため編集から離れられることになりました。コンピューターに堪能な園田姉の尽力により月報の紙面は大きく変わり、教会外でもより多くの方々に読まれるようになりました。園田姉のこれまでのご奉仕に心から感謝いたします。

スモール・グループ

スモールグループは教会員の霊的成長のための教会プログラムです。少人数での親密な交わり(フェロウシップ)を通して、クリスチャンとして実生活でどう生きるかなどを考え、互いに支えあい、高めあうことを目的とします。自分のニーズにあったスモール・グループ1つに所属し、同じメンバーで共に学び、祈っていきます。(自由意志参加)

SG 1. 女性信徒の学び会(バイブル)	第2, 4土1時	園田姉宅
SG 2. 日本人女性の会	第2火11時	時田姉宅
SG 3. 男性信徒の学び会(バイブル)	第2, 4日9時半	教会(日下部兄)
SG 4. 日本語での学び会	第2日2時	教会(春日姉)
SG 5. 日本語「葡萄の木」の会	第4日2時	教会(小林姉)
SG 6. 日本語「証しと祈りの会」	毎月最終金夜7時	寒河江兄宅
SG 7. 英語での学び会	毎月第3日1時半	教会(吉田夫妻)